小林恭二　バイオテクノロジー日記

命はどこへ行くのか

第1回　変わるもの変わらぬもの

不易流行という言葉がある。不易とは変わらないこと、流行とは変わりうつろうこと。

何が変わり、何が変わらないかという見極めはひじょうに難しい。

時として、絶対に変わらないと信じていたものが一夜にして豹変し、あるいはこんなものは一時の流行に過ぎないとタカをくくっていたことが、十年後には主流となっていたりする。

言葉遣いや服装、生活習慣は無論のこと、正義や倫理に関する意識にも不易流行はある。正義や倫理の場合、本来絶対に変わらないから正義でありまた倫理なのだが、そんなのは実はたてまえであって、内実は時代によってころころと変化するから厄介である。

○

それはさておき、今もっとも大きな変化にさらされているのは、生命科学を巡る正義であり、倫理だろう。実際、我々が現在有している生命科学に関する正義や倫理は、十年後には一括して「旧来の」という形容をつけて語られている可能性がある。

それだけ大きな変化に遭遇しながら、我々は思考停止にも似た奇妙な静観を保っている。いや、真摯に考えている人はいるだろうし、それなりの腹案を持っている人もいるだろう。しかし「そのとき」が来てみないと、自分たちがどんな意識を持つかわからない、というのが偽らざる気持ちだろう。

その中でもっとも端的かつ待ったなしの答えを迫っているのが、クローン人間を巡る問題である。

現時点において、クローン人間を肯定する国はないし、世論的にもおおむねクローン人間否定で固まっている。ただそれが人類のクローンに対する「答え」かというと、きわめてこころもとない。なんとなればとりあえず否定はしているが、その根拠がひじょうに曖昧だからである。

たとえば現在もっとも一般的なクローン人間反対論は、正義や倫理の問題というより、技術論に根拠を置いている。すなわ

ち「クローン羊のドリーは二七七回の試行の末ようやく成功した。クローン人間を作る場合も似たような確率になるだろう。これはクローン人間誕生が至難であるということを意味している。更に誕生したクローンの死亡率の高さという問題もある。こうした点を考えれば、クローン人間は現実的な問題たりえない」

先にカナダの宗教家がクローン人間を誕生させたと発表したときも、世界は大きく反応しなかった。虚偽だろうという推測に加え、まだ結論を出すには尚早であるという判断があったからだと思われる。

しかしそれはあくまで「現時点」での問題である。もしその状況が変化すれば（つまりもっと技術が進歩すれば）、この回答は意味をなさなくなる。未来永劫にクローンに関する技術が現状にとどまっていると考えるのは、非現実的だろう。その意味で、技術的な難しさを盾に、クローン人間を否定するのはその場しのぎの答えにすぎまい。

生まれた子供の幸せをうんぬんする論者もいる。つまり天才的な藝術家やアスリートのクローンとして生まれたからといって、その子が幸せに生きられる保証があろうかという論である。

しかし、これはいわゆる「ためにされた」浅薄な意見に過ぎない。生まれた子供が幸せに生きられる保証などというものは、いかなるかたちにおいてもないからだ。クローン少年は不幸になるかもしれないが、ごく平凡な一般家庭に生まれた少年が幸福になれるなどという保証もないのだ。そうした論者はカール・ルイスだから幸せとは限らないと考えるかもしれないが、カール・ルイスは少なくとも絶対にそう語る論者にはなりたくないだろう。クローン人間の問題を、優秀だが不幸なクローンと平凡だが幸福な人類といった二項対立にすりかえるのは正しくない。

「クローン人間の臓器が売買対象になる可能性がある」という人もいる。あるいはある人間が自分のクローンを作り、自分の臓器が駄目になるたびにクローンから臓器を奪って移植し、不死を目指すという事態も考えうるという。

しかしこうした科学技術の犯罪的活用は、さして珍しいことではない。対策としてはクローン研究の禁止を叫ぶより、一片の法律でもって規制する方がはるかに簡単である。まあ、そんなことを思いつく人間は、クローン技術があろうとなかろうと、それに似たような非人間的な行為を行うであろうが。

これらの反対論はクローン問題の正鵠を射ているとは到底いえない。

○

ではもっとも強硬に反対しているといわれる宗教界の反応はどうなのだろうか。

わたしはかつて熱心なキリスト教徒にクローンの是非を訊ねてみたことがある。

彼らは一様に面食らったような顔をした。クローン人間など悪いに決まっている、その理由など考えたことはない、という顔だった。わたしが理由を問うと、神への冒涜だからというきわめて抽象的な答えが返ってきた。

わたしは納得せず、ある高名な宗教学者に同じ質問をぶつけた。彼はしばらく考え込んでいたが、やがて次のように答えた。

「やはりまともな宗教であれば、クローン人間を人間として認めないでしょうね」

「なぜですか」

「たとえばキリスト教は人間という存在を男女の正常な結びつきから誕生したものと定義している。人間はその過程で魂を受け取るからだ。ところがクローン人間は、いつ魂を受け取ったかという点で大きな疑義がある。おそらく魂を受け取ってないとみなされるだろう。魂のない者を人間とは認められない、彼らはそう考えるはずだ」

「クローン人間が教会の門を叩いたらどうするでしょう」

「教会は拒否するでしょう」

「涙ながらに求められても」
「悔やもうと涙を流そうが無駄でしょうね」
「クローン人間は神への冒涜でしょうか」
「意見が割れるところでしょう。神にあらざる人間が人間を創ることは神への冒涜だ、というのは、レトリックとしてわかりやすいのでよく使われます。しかしクローン人間が純粋な意味での生命の創造にあたるかどうかは、疑義がある。つまりこれを生命の創造であるとすれば、他にいろいろと困った問題が生じてくるからです。ただそのように主張する一派も出るでしょうが。やはりいちばんの問題は救済されるべき魂のあるなしであり、そこが宗教として譲れない線でしょうね」
「ではクローン人間が相当数生まれ、社会的に力を有するようになったとき、どうするでしょう」
「わたしにはわかりません。しかし想像はできます」
「どう想像つくのですか」
「おそらく教会は認めるでしょう。キリスト教はこれまで社会の変化に対応させて、教義を変えてきましたから」
　これを読んで不満に思うキリスト教信者もいるだろう。だがわたしはひとつの見解だと思った。少なくとも他の論者よりも筋が通っている。

こばやし・きょうじ
作家。1957年兵庫県生まれ、東京大学文学部美学藝術学科卒業。84年に『電話男』でデビューして以来、実験的作品を次々と発表。98年、『カブキの日』で三島由紀夫賞受賞。現在、読売新聞夕刊に『宇田川心中』を連載中。以前からバイオテクノロジーに関心をもち、次作にはクローンをテーマにした作品を構想している。

○

　現時点でわたしはクローン人間はもとより遺伝子治療や動植物の遺伝子組み替えについても、どう考えるべきか確たる指針を持っていない。おそらく読者の多くもそうだろう。この連載では第一線の科学者や場合によって宗教家、倫理学者にもインタヴューをしてゆくつもりだが、そうした倫理的な指針を掴むためのものだと考えていただければ幸いである。
　ちなみにその点について、わたしは三つのアプローチを考えている。
　一、生命科学に関わる最先端の科学者を訪ね、その技術がいったいどこまで進んでいるのか、そしてそれは具体的に何をもたらすか、訊ねる。
　二、科学者自身がこうした技術を現代社会において、どこまで活かし、あるいはどこを封印すべき（もしそう考えているならばだが）と考えるか、訊ねる。
　三、直接科学に携わらない人間たちが、そうした技術をどう考え、もし許し難い一線があるとすれば、どこがその一線となるか、訊ねる。（もちろんその理由も。）
　こうしたインタビューで結論が出るとはわたしは思わない。しかしとりあえずこの厄介な問題について、わたしたち一人一人が考える指針が生まれるとは思うのだ。